

第 15 回

「一脳疾患既往者の安全な自動車運転を目指して— 運転再開支援の効果検証と運転行動時の認知的特性の解明」

小田桐 匡 (健康科学部理学療法学科 准教授)

「暑くて熱いベトナム滞在報告～ベトナム風土・経済・大学～」

森 純一 (国際英語学部国際英語学科 教授)

開催日時：2019 年 11 月 27 日 (水) 15:00-17:00

開催場所：京都橘大学 響友館 F301

実施報告

一脳疾患既往者の安全な自動車運転を目指して—運転再開支援の効果検証と運転行動時の認知的特性の解明

理学療法学科 小田桐 匡

我が国の脳血管疾患の患者数は 110 万人を超え第 3 位 (厚労省 2017) となります。その多くは退院時に自立歩行が可能 (脳卒中データバンク 2015) となり、また自動車運転についても再開を希望するようです。しかしながら、自動車運転には記憶、注意、言語など幅広い認知機能が必要で、関連する脳領域も歩行以上に広範であるため、これらを考慮した慎重な評価と判断が求められます。

ところが脳血管疾患患者の運転能力評価法は未だ確立されていません。それを反映して、運転能力評価を実施する医療機関は少なく、先駆的に取り組む施設でも、数少ない情報と経験を頼りに行わざるを得ない状況があります。そのため、『運転能力評価の妥当性を検証したい』『より科学的な評価方法を確立したい』との医療現場の声は切実で、それに何とか応えようと我々の研究は始まりました。

これまでの運転研究は、運転能力評価の本質的な問題、“どのような認知機能障害がどのように実際の運転に影響するのか”という点について、ほとんど明らかにできませんでした。しかしこの問題の解明は、既存の運転能力評価法の検証や開発、さらには事故予防のための環境整備、患者・家族への運転指導などに広く貢献することに繋がります。そこで我々は、脳血管疾患後遺症者を対象に、路上運転中の眼球運動・脳波・心電図の分析を通してこの問題に挑戦しました。本研究は大学 (ゼミ生も含む)、医療機関、教習所の協力のもと行われました。

本サロンでは研究成果の一部を報告しました。認知機能検査だけではわからない注意障害の影響や特徴について示しました。Q&A では高齢者や認知機能障害者の運転問題など沢山の貴重なご意見を頂きました。

追伸 今回の報告内容は 12 月の日本安全運転・医療研究会でも報告し、大変な反響が寄せられました。京都府警の方も来場され、貴重なアドバイスも頂きました。今後さらに発展させていきたいです。



路上運転時の計測画面

上段左右：ドライブレコーダ画面、下段左：室内カメラ画面、下段右：アイカメラ画面



研究グループとともに (於：日本安全運転・医療研究会、著者：上右端)

日本とベトナムの交流は急速に進展しています。2018年の外国人訪日者数で最も伸び率の高い国はベトナムでした。また、日本で学ぶ留学生数でもベトナムは中国に次ぐ第2位です。ベトナムに進出している日本企業は1,848社もあります。ベトナムを理解することは日本にとって、とても重要です。

私は昨年まで2年間、国立ダナン大学に滞在し教鞭を取りました。ダナンはベトナム中部の都市で同国の最も近代的な都市として急激な成長を遂げています。滞在中の毎日は驚きの連続でした。私の研究分野である経済の理解には、自ら現地に滞在し、ベトナムの人々と一緒に生活して、様々な経験を積むことがいかに大切かを痛感しました。

研究サロンでは、そんな私の経験から、経済学の研究を少し離れて現代のベトナムを理解するのに役に立つと思うポイントを選び、色々な角度からのお話をしました。たとえば普通の庭先に大きなジャックフルーツが実ったり、日本への輸出が急進する花卉生産、和歌山の鯉節の会社がベトナムで鯉節生産をしていることなどの農林水産の話、あるいは一人当たり国民所得は日本の1/5分の1でありながら立派なショッピングセンターが出来て、大皿のにぎり寿司がベトナム人家族にドンドン売られている状況、そして現地の大学での学生の起業支援などです。

講演後のQ&Aでは、ASEAN諸国相互間の国民レベルでの感情や、ベトナムにおける格差拡大、ベトナム茶の生産、日本から進出している有力企業など、大変にポイントを突いた面白い質問をいただきました。学際的な研究が重要な時代です。多様な分野の研究者間での議論がいかに重要か、今更ながら気付いた次第です。



シナモンの選別作業（筆者撮影）



ハノイ工科大学の学生起業支援センター（筆者撮影）

参加者報告

今回の研究サロンでは、最初に、健康科学部の小田桐先生より、脳血管疾患既往者の安全な自動車運転を目指した運転再開支援の効果検証と運転行動時の認知的特性の解明に関する研究報告が行われた。本研究は、日本の傷病患者数第3位を占める脳血管疾患既往者の運転適性評価における科学的なエビデンスの創出に貢献するものであり、とても興味深く勉強になった。

次に、国際英語学部森先生より、現地滞在のご経験に基づくベトナムの風土・経済・大学に関する最新の報告が行われた。人口規模や豊かな風土などを背景に経済成長を遂げるベトナムだが、大学教育と実業界のニーズのミスマッチという課題に直面していること、その解消に向けて、国を挙げての企業支援活動が展開されていることなどが紹介された。演題のとおり、まさに“hot”な報告にベトナムに対する興味や理解が一層深まった。

各報告後には、活発な質疑応答や意見交換が行われ、参加者相互の交流が図られた。

